國學院大學学術情報リポジトリ

「宗教文化の授業研究会」の試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平藤, 喜久子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001799

「宗教文化の授業研究会」の試み

平藤喜久子

1. はじめに

「宗教文化士」制度の検討がなされるなか、宗教文化に関する授業が各大学でどのように行われているのか、ほかの研究者はどのようなことに悩み、授業運営を行っているのかということへの関心が高まっていった。問題意識を共有し、情報提供し合う場があれば、互いの授業運営に資することができるのではないだろうかということで、科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表：星野英紀・大正大学）で行う教材研究の一つの試みとして、2009 年 12 月に「宗教文化の授業研究会」が発足した。世話人は岩井洋（帝塚山大学）、黒﨑浩行（國學院大學）、平藤喜久子（國學院大學）、弓山達也（大正大学）である。2010 年 6 月には「宗教と社会」学会のプロジェクトとして承認され、「宗教文化の授業研究」プロジェクトの名の下に活動を続けることとなった。また 2011 年には科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表：井上順孝・國學院大學）プロジェクトがスタートし、この研究課題と密接に連携しながら活動を行っている。

本稿ではこの「宗教文化の授業研究会」の活動について、その発足の背景、これまでの活動内容を紹介し、今後の展望について述べることとする。

2. 研究会発足の背景

はじめにこの研究会発足のきっかけとなった宗教文化士制度について述べておきたい。グローバル化が進み、日本も多文化社会になってきている。そうした状況から、自国や他国の宗教についての基本的な知識を得る必要があるとの認識が強まり、宗教文化に関する教育の必要性が認識されることとなった。しかし中等教育については 2002 年 11 月中央教育審議会の中間報告で「学校で子どもを宗教に触れさせようとしても，様々な宗教を教えることができる教員は少ないなどの問題がある」と指摘されるなど、宗教を教えられる人材の育成が課題となっている。これは高等教育機関である大学における宗教文化教育のあり方にも再考を促すものであろう。筆者は宗教文化士資格の発足について、こうした社会的要請に応える試みの一つであると理解している。

宗教文化士制度の特徴として、受験資格に大学で宗教文化士の到達目標[(1)]と関連した科目の単位を 16 単位以上取得していることを挙げているという点がある。大学での授業を重視しているということは、先に述べたような宗教文化を教えられる人材の育成ということに応えることになるだろう。しかし、そのぶん大学で宗教文化に関わる授業を教える教員は、これまで以上に授業の充実が求められることとなる。このことは授業経験が浅い筆者にとっては、あらためて授業のあり方について考える機会となった。

筆者が大学ではじめて授業を担当したのは 2000 年であった。それから現在までに担当し

た授業の科目名を数えてみると、17 科目ほどになる。もちろんすべてが専門としている神話学、日本神話の授業というわけではない。日本の宗教や世界の宗教、作文、日本文学、比較文化論のほかに、留学生向けに英語で行う日本宗教の授業や日本文学の授業も含まれている。

専門としている領域に関する授業であれば、授業や教材に研究の成果を反映させていくことも可能であろう。しかし専門から少しずれると、はたしてこの教材は適切なのだろうか、用語の用い方に間違いはないだろうか、最近の研究状況を反映できているだろうかといった点で、不安は大きくなる。はじめて担当する授業、分野であれば、なおさらである。このように専門としている分野以外の授業を担当するということは、筆者に限らず、今では当たり前のこととなっており、多くの研究者が経験しているだろう。

他方、大学でも授業の質を高めることが課題となっており、それぞれの大学で FD（Faculty Development）という名の下に講演会やワークショップ、授業評価アンケートなどといったさまざまな取り組みがなされている。たしかにマルチメディア教材やインターネットの利用方法、メディアリテラシーの向上など一般的な課題については、ほかの授業科目とも共通する課題であり、大学としての対応もある程度可能だろう。しかし学問領域ごとに抱える固有の課題もある。宗教文化にかかわる授業であれば、「宗教」、「信仰」を扱うということから起こる問題や授業運営上の困難さがある。こうした困難さについて、大学の FD で応えられることは、あまりないのではないだろうか。

たとえば筆者がとくに宗教文化に関する授業で、困難さを感じたのは、留学生と日本人がともに学ぶという授業であった。基本的には留学生を対象とし、現代の日本社会と宗教との関わりについて考えるリサーチ・アンド・プレゼンテーションの授業である。発表担当の学生のプレゼンテーションを踏まえ、ほかの学生とディスカッションをする。その際に、ある宗教団体の実名を挙げ、入信した友人の変化を述べ、その教団の問題点を述べるという発表があった。たしかに社会的に問題の指摘されている教団ではあったが、自分で調査をしたことがあるわけでもない。学生から「この教団はカルトですか？」という質問を受け、どう返答してよいのか大変困惑した。この質問は、留学生が勧誘を受けることもあるため、授業以外の場でもよく聞かれる。知っている事実があれば、それのみを伝えるように心がけているが、価値判断を求められるような場合、ほかの研究者はどのような対応を取っているのか、問いかけたいと思った。

このほかこの授業ではこれまで政治と宗教の問題、靖国問題、同性愛と宗教の問題、イスラームのスカーフ問題、死刑制度の問題など、学生が提起した話題は多岐に亘り、戸惑う議論が展開することも多い。このような多文化教室で「信仰」を議論することは、今後も増えてくるだろう。

こうした宗教文化のさまざまな領域にわたる授業に対応しなければならない状況におかれ、さらに大学における宗教文化関連授業全体の質を上げていく必要にせまられたとき、個人の資質でさまざまな問題を解決していくのではなく、直面している問題を共有し、情報交換をしていく場を作ることが必要になると考えた。具体的には、どのようなテキスト、教材を使っているのかというレベルの問題や、宗教施設見学に連れて行く場合、注意する点はなにか、先に挙げたような問題を指摘されている宗教団体を授業で取りあげる際の距離の取り方をどうするべきか、といった問題について議論を重ね、共同調査なども行いたいと考えていた。

そこで科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表：星野英紀・大正大学）に参加し、問題意識を共有していた岩井洋、黒﨑浩行、弓山達也と筆者の4名が世話人となって宗教文化の授業研究会を発足させることとなった。岩井氏は、宗教社会学が専門であるが、教育デザインの分野でも活躍しており、とくに大学の初年次教育に造詣が深く初年次教育学会の理事もつとめている。黒﨑氏も國學院大学神道文化学部で教務委員を務め、またメディアリテラシー教育や教材としての画像利用などについての研究も行っている。弓山氏は大正大学でさまざまなスタイルの教育方法を実践しており、討議型の授業は雑誌『SAPIO』の「『ハーバード白熱教室』が日本にもあった」でも取り上げられている（2010年10月）。いずれも大学での教育について、問題意識をもって取り組んできた研究者である。そのほか中堅から若手を中心にメンバーが参加しており、MLで情報を流し、研究会を重ねてきている。

3. これまでの活動内容

本研究会では、2011年の前期までに5回の研究会と1回の宗教施設見学研究会を開催した。以下に概要を記す。

第1回研究会
【日時】 2009年12月26日（土）14時～
【場所】 國學院大學学術メディアセンター5階会議室06
【討議内容】「今後の研究会の活動内容について」

第2回研究会
【日時】 2010年2月28日（日）13時～
【場所】 國學院大學学術メディアセンター5階会議室06
【討議内容】「カルトの教え方」
【発表者】櫻井義秀（北海道大学）、弓山達也（大正大学）、近藤光博（日本女子大学）

第3回研究会
【日時】 2010年7月4日（日）13時～
【場所】 國學院大學学術メディアセンター5階会議室06
【テーマ】「宗教の授業と調査法」
【発表者】川又俊則（鈴鹿短期大学）、木村敏明（東北大学）

第4回研究会
【日時】 2010年9月12日（日）10時30分～
【場所】 國學院大學学術メディアセンター5階会議室06
【テーマ】「調査映像を授業にどう使うか」
【発表者】井上順孝（國學院大學）
【コメンテーター】西村明（鹿児島大学）

第 5 回研究会
【日時】 2011 年 1 月 8 日（土）15 時～
【場所】 國學院大學学術メディアセンター 5 階会議室 06
【テーマ】ニュージーランドにおける宗教文化教育
【発表者】Erica Baffelli（ニュージーランド・オタゴ大学教員）

第 1 回宗教施設見学研究会
【日時】 2011 年 7 月 10 日 13 時半～
【場所】ニコライ堂、神田神社、湯島天神
【参加メンバー】猪瀬優理、平藤喜久子、溝口大助、ヤニス・ガイタニディス、天田顕徳
【参加大学】國學院大學、東京外国語大学、東洋英和女学院大学、法政大学、龍谷大学、首都大学東京、埼玉大学、明治学院大学

第 1 回の研究会、および第 2 回の研究会については、『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所紀要』第 3 号で黒﨑浩行氏が「宗教文化の授業を考える研究会」と題して詳しくまとめているので、そちらを参照していただきたい[(2)]。

ここでは第 3 回目以降の内容を簡単に紹介していく。第 1 回の研究会では、世話人から研究会で取り上げるべき問題の提起を行い、参加者と討議をした。その際に、宗教調査を採り入れた授業の展開方法とその問題点について、今後取り上げていくことが確認された。そのことを受け、学生が宗教調査を行う授業を指導した経験を持つ川又俊則、木村敏明両氏に発題を依頼した。川又氏は「社会調査実習としての宗教調査―「2001 年度の試み」とその後」と題する発表を行い、学生に日本の現代キリスト教に関する社会調査を体験させた際の方法や問題点などを報告した。木村氏は、「集団合宿調査の理念と現実―東北大学宗教学研究室「宗教学実習」のとりくみ」と題する発表を行った。東北大学の宗教学研究室では、毎年地域を定め、集団合宿調査を行っている。長年の取り組みから見えてきた最近の傾向や問題点が指摘された。調査法は、研究者にとっても関心の高いテーマであり、多様な方法が可能であるため、討議の際には活発な議論が交わされた。

第 4 回の研究会では、調査で撮影された映像や画像をどう授業に活用していくかを検討することとした。「調査映像を授業にどう使うか」いうテーマで、井上順孝氏が発題した。1970 年代に 8 ミリカメラの使用をはじめてからのツールの変遷や、撮影した素材を授業に使用するときの編集の仕方などについて、実際の貴重な映像や画像を示しながら論じた。研究者が撮影する映像は自ずとほかとは異なってくるということがわかり、学ぶ点が多かった。コメンテーターの西村明氏を中心に、総合討議では学生の宗教に関する映像のリテラシーの向上をどうするべきか、また授業で利用する際の注意点はどこにあるのか、などの点について議論を行った。

第 5 回のニュージーランドのオタゴ大学で教鞭を執る Erica Baffelli 氏が、「ニュージーランドにおける宗教文化教育」と題するテーマで発題を行った。Baffelli 氏は日本宗教が専門であることから、日本の宗教を海外で教える際の教材について語った。ニュージーランド固有のこととして、マオリ族の文化に対する一定の配慮が求められるといった点なども紹介された。

2011 年度は、科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者：井上順孝）の研究と連動し、宗教文化教育の教材に関する議論を深めることや、模擬授業、宗教施設見学といった学生参加の研究会も行っていくこととなった。そこで、7 月には、筆者が中心となり、第 1 回宗教施設見学研究会を開いた。訪問先は、神田、お茶の水を中心に、ニコライ堂（ロシア正教）、神田神社、湯島神社とした。

筆者は東京外国語大学国際教育プログラム（ISEPTUFS）において留学生と日本人学生向けの日本宗教の授業を担当している。この授業のエクスカーションとして、毎年都内の神社ツアーを企画してきた。数年前より、このツアーを國學院大學の神道文化学部学生とともに行い、外国人に神道を伝えられるようになることも目標に加えた。このツアーを、本研究会のメンバーにも開き、共同で行うことを企画した。そのような経緯から、今回の宗教施設見学研究会についても、企画は筆者が 2010 年度國學院大學で担当した「神道と国際交流」の受講生が中心となって行った。

参加者は國學院大學の神道文化学部の学生、同じく國學院大學に留学している学生のほか、東京外国語大学、東洋英和女学院大学、法政大学、龍谷大学、首都大学、埼玉大学、明治学院大学の留学生、日本人学生 30 名余りが参加した。国籍も多様で、中国、韓国、台湾、アメリカ、カナダ、イギリス、イタリア、スペイン、チェコ、オーストラリア、ベナンなど十数ヶ国に及んだ。

ニコライ堂では、國學院大學研究開発推進機構 PD 研究員のヤニス・ガイタニディス氏が東方正教会、ロシア正教、ニコライ堂について説明を行った。堂内では、ボランティアの方が丁寧に建築の特徴などの説明を行って下さった。日本人や中国人の学生の多くは、キリスト教の教会を訪問するのがはじめてということであった。ここではボランティアの方から、入堂の際に脱帽だけではなく背負っているリュックも下ろすよう指導があり、宗教施設を訪問するときのマナーや信者にとっての教会の意味が印象に残ったと話す学生もいた。

宗教施設見学研究会の様子（ニコライ堂）
撮影：天田顕徳

神田神社と湯島神社では國學院大學の神道文化学部の学生が各神社の歴史や信仰の説明、神社建築、絵馬やお守り、参拝作法などについて説明を行い、必要に応じて筆者が補足を加えた。説明を行っている場面の写真を付しておく。

宗教施設見学研究会の様子（神田神社）　撮影：天田顕徳

とくに近年神田神社で増えている痛(いた)絵馬と称されるマンガやアニメのキャラクターを描いた絵馬は、学生たちの関心も高く、写真撮影を行っていた。日本人の学生の多くは、毎年初詣などの機会に神社を訪れているが、神社の由来や祭神、参拝の作法を学ぶのははじめてであり、さまざまな質問を投げかけていた。

案内をした神道文化学部の学生たちのほとんどは、卒業後神職を目指している。彼らは、手水の際に口をすすぐよう指導するかどうかを議論したり、ほかの学生たちからさまざまな質問を受ける経験をしたりすることで、あらためて神道を伝えることの難しさを感じたようであった。

さまざまな大学の教員が共同で学生を引率し、宗教施設の見学を行うことは、今回が初めての試みであった。学生の国籍や年齢、専攻分野などに広がりが生まれ、学生への教育効果は高いのではないかと感じた。しかし、予想していた以上に学生の参加希望者が多く、そのぶん移動時間に時間がかかったり、境内での説明が難しかったりという問題点があった。神社という日本人にとって身近な宗教施設であるはずのものでも、専門的知識のある人から説明を受けて、見学したいというニーズが高いということだろう。担当教員としてはうれしいことでもあるが、運営の仕方については、訪問先のことも考え、今後検討していく必要があ

ると感じた。

痛絵馬をみる留学生たち（神田神社）　撮影：天田顕徳

4. 今後の展望

第 1 回の宗教施設見学研究会を企画し、宗教施設を訪問したいという学生側のニーズが高いこと、また連れて行きたいと考える教員も多いこと、そしてそのためには訪問先の宗教についての専門的な知識の提供者の存在が望ましいことがわかった。そこでこのテーマについては 2011 年度の後期にも取り組んでいくこととした。10 月には、國學院大學の井上順孝教授の企画で創価学会の本部見学も行う。新宗教の教団見学は、学生の関心が高いものの、教団そのものとの関わり方や交渉をどのように行っていくのかについては、難しいことも多く、新宗教研究を行っていないほかの分野の専門家には難しい。そういった技術的な側面についても、学ぶ機会としたい。2012 年 1 月には、星野英紀大正大学教授・國學院大學客員教授のご厚意により、福蔵院の節分行事を対象として行う予定である。研究会のメンバーの構成から、必然的に開催地が都内になっているが、関西でも複数の大学の教員で共同の見学会をという要望があることから、関西の見学研究会も今後企画していく。さらに、宗教施設にかぎらず博物館見学も課題となるだろう。国立民族学博物館など、宗教に関連する充実した資料を所蔵する博物館を授業でどう利用していくかについても、一度取り上げる必要があると考える。

そのほか従来行ってきた授業方法についての研究会も企画していく。科学研究費による「宗教文化教育の教材に関する総合研究」と連動し、宗教文化教育の教材にかかわるテーマに取り組んでいくことになる。視聴覚教材の共有方法、教科書の選定方法といった課題のほか、落語や歌舞伎などの伝統芸能を教材としてどう活用するかなどの具体的なテーマなども考え

られるだろう。

今後も宗教文化の授業をあらたに担当するような若手の研究者の参加を国内外問わず促していき、情報交換を行いながら、あらたなテーマにも取り組んでいくこととしたい。

注

(1) 宗教文化士の到達目標は次の3つである。

1. 教えや儀礼、神話を含む宗教文化の意味について理解ができる。
2. キリスト教、イスラーム、ヒンドゥー教、仏教、神道などの宗教伝統の基本的な事実について、一定の知識を得ることができる。
3. 現代人が直面する諸問題における宗教の役割について、公共の場で通用する見方ができる。

(2) 黒﨑浩行「宗教文化の授業を考える研究会」(『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』第3号、2010年9月)、21-23頁。